

第 **115** 号
2016.1

北海道 米麦改良

稲作

- ・平成27年産 米の全道総括
- ・「北海道 稲作に挑戦する人々」

麦作

- ・平成27年産 小麦の総括
- ・平成27年度 北海道産小麦流通実態調査報告
- ・第36回(平成27年度)北海道麦作共励会審査結果
- ・平成27年度 全国麦作共励会審査結果

稲作
麦作

- ・平成27年度 稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ



会報誌「北海道米麦改良」はホームページでもご覧になれます。
<http://www.beibaku.net/>

一般社団法人 北海道米麦改良協会

売れる米を 低コストで 安定生産

めざそう 小麦の 品質向上

適正な 農産物検査の 実施



も く じ

稲作	平成27年産 米の全道総括	1
	「北海道 稲作に挑戦する人々」	6
麦作	平成27年産 小麦の総括	10
	平成27年度 北海道産小麦流通実態調査報告	14
	第36回（平成27年度）北海道麦作共励会審査結果	18
	平成27年度 全国麦作共励会審査結果	19
稲作・麦作	平成27年度 稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ	20

稲 作

平成27年産 米の全道総括

北海道農政部生産振興局 技術普及課 農業研究本部技術普及室

上席普及指導員（農業革新支援専門員） 竹 内 稔

1. 作柄の概況

平成27年の北海道米の作柄は、全道各地で平年作以上を確保し、5年連続の豊作となった（図1）。北海道農政事務所（以下農政事務所）公表による全道の10a当たり平均収量は559kg（作況指数104）で、道南方面では「平年並」に留まるものの、主産地の上川（104）、北空知（103）、南空知（106）、石狩（106）などでは「やや良」から「良」となっている。

また、品質面では製品歩留が高く、10月末日現在の米穀検査実績（農政事務所速報値）による一等米率は、うるち・もち米とも90%

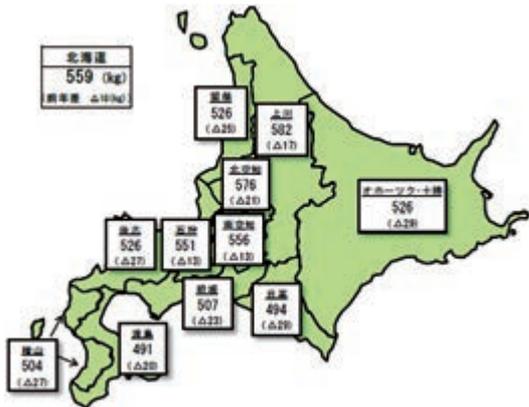


図1 地帯別10a当たり収量 (12月4日公表、北海道農政事務所)

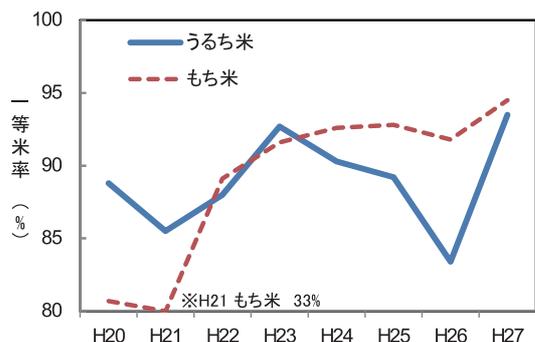


図2 年次別の1等米率 (北海道農政事務所) ※H26-3/31、H27-10/31 各々速報値

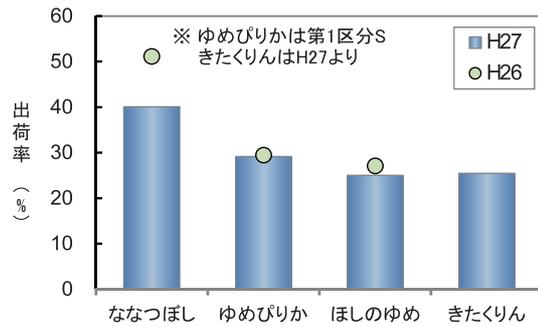


図3 品種別の低タンパク米生産状況 (ホクレン、12/16現在)

前半となっており、近年の中では最も高い品質レベルとなっている（図2）。

一方、ホクレン仕分け集荷（主要五品種）による低タンパク米（白米のタンパク質含有率6.8%以下）の割合は、全道平均で約38%と昨年並で推移しているが、例年よりは品種間の差は縮まっている（図3）。

2. 気象経過と生育の推移

(1) 早期融雪と順調な春作業

各地の根雪終日（平年対比）は旭川で3月26日（早13日）、岩見沢で3月29日（早7日、岩見沢試験地）、函館2月28日（早13日）と

表1 平成27年各地域の根雪終日

(1981~2010平均、アメダス地点)

区分	長期積雪（根雪）終日			
	平成27年	平年	差(日)	26年の差(日)
札幌	3月26日	4月3日	+8	+12
旭川	3月26日	4月8日	+13	+20
岩見沢※	3月29日	4月10日	+12	+18
網走	3月30日	4月3日	+5	+16
函館	2月28日	3月13日	+13	+26

注：※は岩見沢試験地、平年値は1971~2000年、+は早い

表2 全道各地における作業期節と生育期節の比較 (H27)

振興局名	作業期節				生育期節				
	は種期	耕起盛期	移植期	収穫期	出芽期	分けつ始	幼穂形成期	出穂期	成熟期
石狩	+1	+4	+3	▲3	+3	+3	±0	▲2	▲2
空知	+1	+6	+4	▲5	+2	+2	▲1	▲3	▲4
後志	+1	+2	+3	▲1	+1	+3	±0	±0	▲1
上川	+1	+4	+3	▲7	±0	+2	▲3	▲5	▲8
留萌	+1	+3	+2	▲5	+2	+3	▲2	▲3	▲3
渡島	±0	+3	+3	+2	+1	+5	+5	+4	+3
檜山	±0	+4	+4	▲1	±0	+4	▲2	▲2	▲1
胆振	▲1	+6	+2	▲2	±0	±0	▲3	▲2	▲2
日高	+1	+3	+2	▲1	+2	+1	▲1	±0	±0
オホーツク	▲1	+4	+3	▲13	+1	+1	▲1	▲2	▲13
平均	4/19 (+1)	5/2 (+5)	5/22 (+3)	9/27 (▲5)	4/25 (+1)	6/5 (+2)	7/1 (▲2)	7/30 (▲3)	9/15 (▲4)

※普及センター作況調査ほによる。
 ※ ()内は平年に対する遅速、+は早い、▲は遅れ。

平年に比べ、大幅に早まった(表1)。
 また、融雪後も好天が続いたため、ほ場の乾燥が進み、耕起盛期は5日早まり5月2日となった(表2)。ほ場の乾燥は耕起や碎土を容易にし、乾土効果による土壌窒素の発現量も昨年並に多くなったものと思われる。

は種作業はほぼ平年並に始まり(全道平均のは種期：4月19日)、一時寡照な時期がみられたものの、出芽の揃いは良好であった。育苗期間全般を通じ、天候が安定していたことで、良好な苗質を確保した(図4)。ただし、地域によっては強風の影響で十分な換気が行えなかったため、徒長したものも見られた。

移植作業は、本田作業が早まり育苗期間も順調であったことから、平年に比べ3日早く

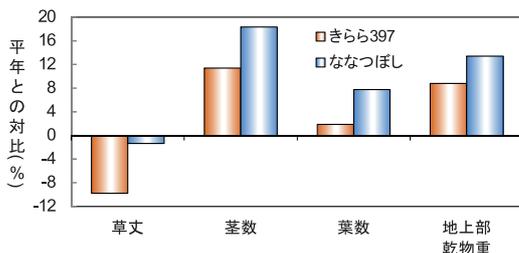


図4 移植時苗質の平年比較
 (中央、上川、道南3農試の平均値)

終了した(全道平均の移植期：5月22日)。

(2) 初期の生育不良と7月の気温低下

活着も移植の早期化から早まったが、移植直後の低温と強風の影響でやや植傷みがみられた。

その後は6月中旬頃まで日照が少なく、最高気温も低めで経過したことから生育は停滞し、道南方面を除き、草丈の伸びや低節位の分けつが抑制されたところが多かった(図5)。

6月下旬には天候は回復したものの、生育は戻らず、茎数では平年比1割程度少なくなり、草丈の伸長も含め生育量は平年より劣っ

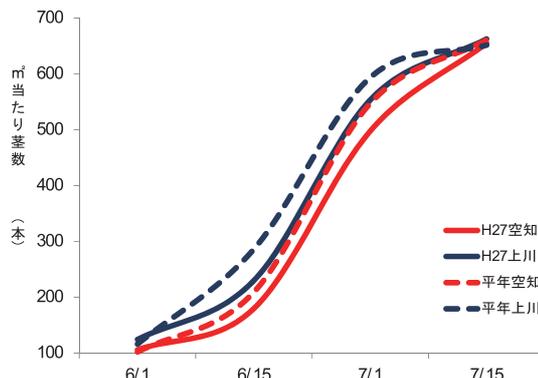


図5 時期別の茎数の推移
 (道農作物生育調査)

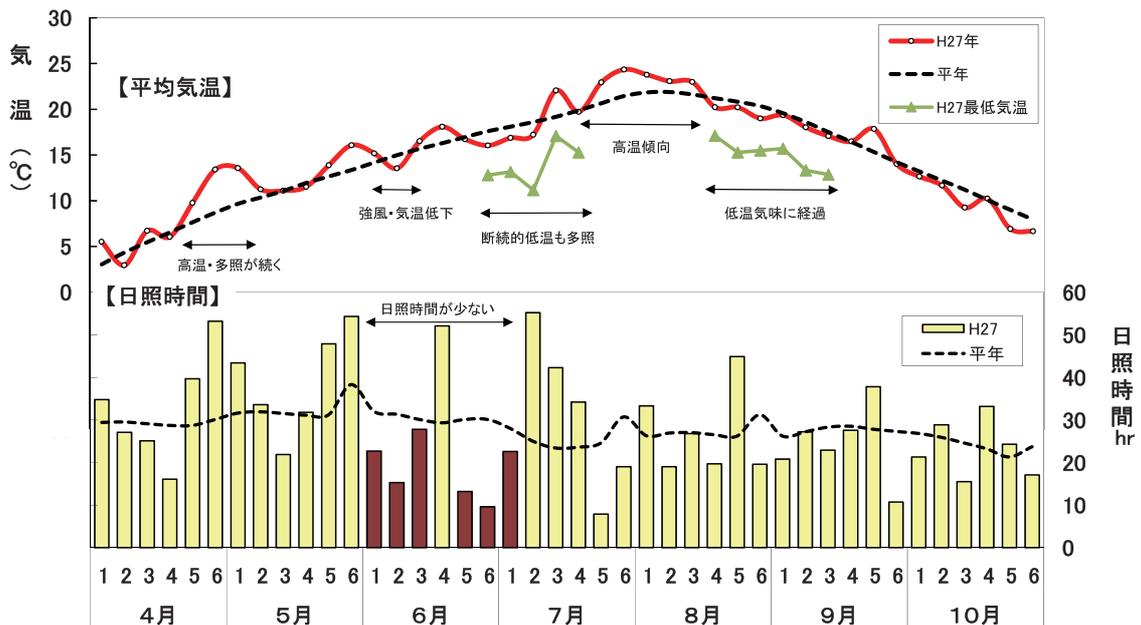


図6 平成27年の半旬別気象経過 (岩見沢アメダス)

た。特に同じ地区内でも移植の遅れたところや中苗などでは、その傾向が強かった。

7月に入ると断続的に低温に遭遇したが、生育時期が冷害危険期前であったことや比較的日照時間に恵まれたこと、適切な水管理が実施されたことなどから不稔の増加は回避された(図6)。

また、幼穂の確認後も莖数が増加し続けたことで、最終的には平年並の穂数を確保した。全道平均の出穂期は7月30日で平年よりも3日遅れたが、出穂期間が高温で経過したため、遅発分げつが多い割には穂揃いが悪くならなかったところが多い。

(3) 収穫は長期化するも、製品歩留は高い

前半の登熟は高温傾向により、極めて順調に推移した。だが、登熟後半にあたる8月中旬以降になると、低温寡照な状態が長期間続いたため、籾の黄化進度は急激に減速し登熟は一転停滞気味となった(図6)。その結果、成熟期は平年対比4日遅れの9月15日となった。

収穫作業は、9月上旬から始まる地域がある一方で、緩慢な登熟により弱勢穂の黄化が遅れたことや断続的な降雨や台風並の暴風雨

による中断、他作物との競合などで長期化した(全道平均の収穫期：9月27日、遅5日)。

また、短時間に強い降雨があった日が多かったことや、刈遅れほ場の増加、紋枯病(一部疑似紋枯病を含む)などの影響から、例年より倒伏面積は多くなっている。

3. 収量確保の要因と品質・食味の特徴

(1) 作柄を決めたポイント

今年の作柄は、出穂するまで予断を許さない状況であり、綱渡りの状態ではあったが、結果的に事なきを得たと言える(図9)。

収量を確保した要因は、総籾数では平年を下回る地区が多かったものの、不稔が少なく稔実籾数を確保できたことに加え、登熟歩合も向上し製品歩留も高くなったためである(図7、8)。

出穂前後の日照は少なめだが、登熟前半は気温が高く(図10、11)、籾数も適正範囲に収まったことで、初期登熟はすこぶる順調となり、白未熟粒や死米の発生も見られず、整粒歩合は向上した。また、屑米率も低めで品質も良好となった。

ただし登熟終盤は、悪天候が続いたことで、

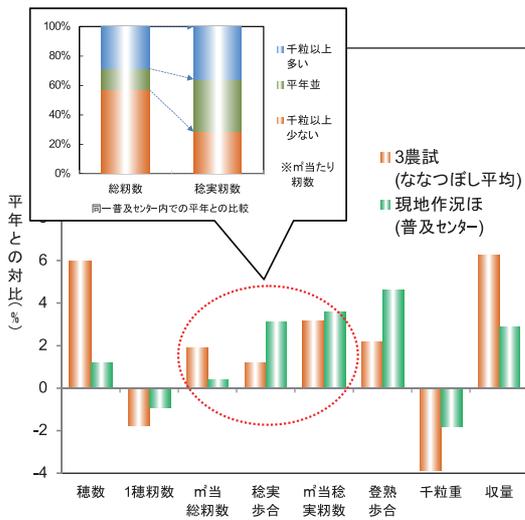


図7 収量構成・決定要素の平年対比

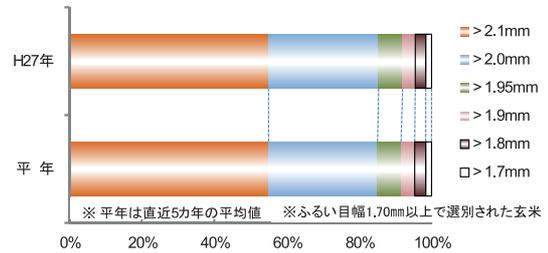


図8 ふるい目幅別重量分布の状況 (北海道農政事務所)

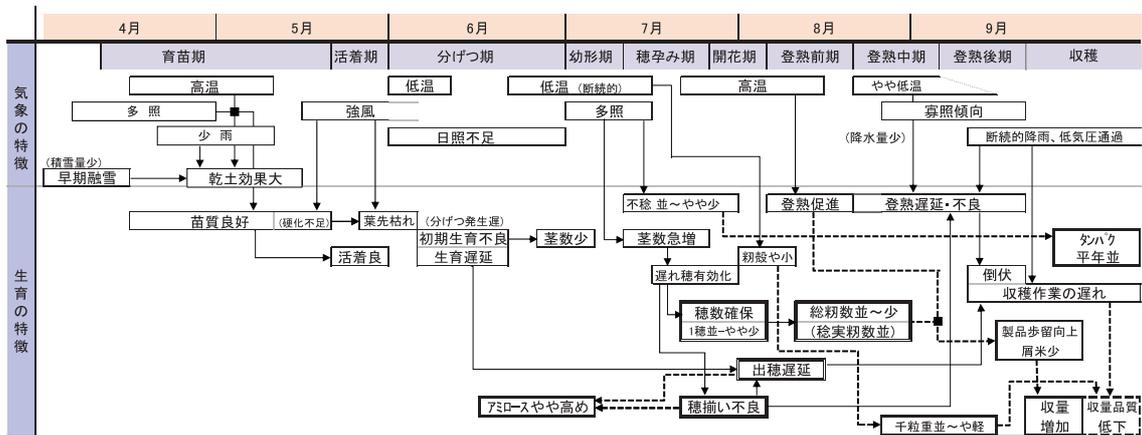


図9 平成27年の作柄に関する要因関連図

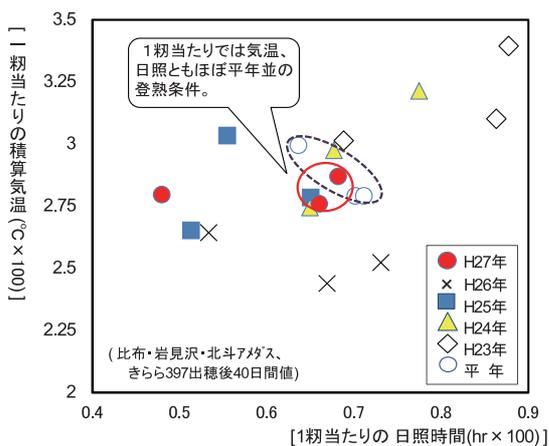


図10 年次別の1 籾当たりの登熟積算温度 積算日照時間の比較 (稔実籾数、3 農試)

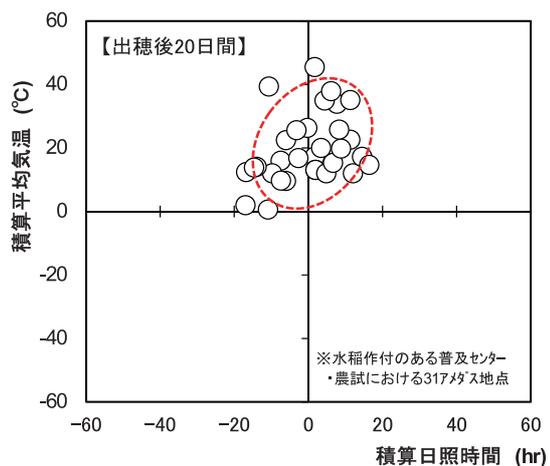


図11 平均気温と日照時間積算値と平年値の比較①

徐々に倒伏が拡大し、一部で品質低下をもたらしている。

(2) 高品質だが食味のフレが多い

昨年は網目上に大きな青未熟粒や死米が残り、品質維持に苦労したが、今年は収穫の遅

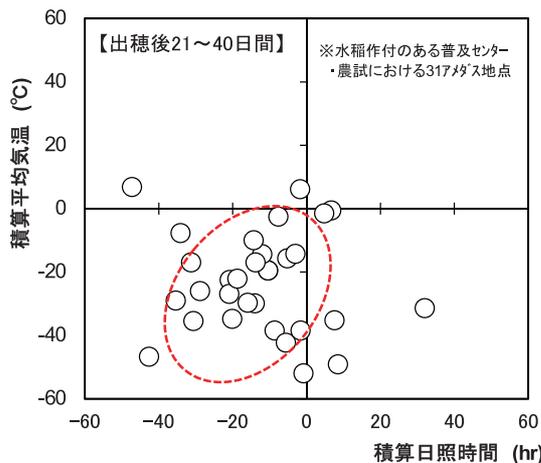


図12 平均気温と日照時間積算値と平年値の比較②

れが大きいところや倒伏の激しいところ以外は高品質を維持している。

これは、前述したように適正籾数の確保と登熟前半の高温が、玄米の初期肥大を向上させ、粒張りが良くなり、製品歩留の上昇はもちろん、登熟不良が原因のシラタや青未熟粒の発生を防いだことによる（図10、11）。

また、食味に関しては、タンパク質含有率が不稔発生率の低下によって、上昇が抑えられほぼ平年並に近くなったものの、弱勢穂による籾数確保の割合が多いものでは、やや高めとなっている。

一方、アミロース含有率はやや高めの傾向がうかがえるが、例年以上に地域や個人によるフレが大きい。この要因として、親穂を含む優勢穂においては、登熟前半の高温で必要な積算温度を確保した反面、登熟後半の温度低下により、遅れ穂では積算温度が不十分であったものと考えられる（図11、12）。

4. 病害虫の発生状況

一昨年、ほ場でも散見されたばか苗病は、採種ほの防除対策や種子消毒の徹底により今年も少なかった。

いもち病は、早くから好適感染条件を満たす日が頻繁に現れ警戒を要していたが、葉いもちの発生は極めて少なく、穂いもちにいたっては登熟後半に散見された程度で、被害

はほとんどみられなかった。

紋枯病（疑似紋枯病含む）は、発生自体はみられるものの、ここ数年に比べると発病程度は軽く、また過去に被害があったほ場では適期防除が行われており、大きな被害は認められなかった。ただし、一部で倒伏を助長した事例も見られる。

害虫関係では、例年に比べるとイネミズゾウムシの被害が目立った。

また、アカヒゲホソミドリカスミカメは、7月6半旬頃急激に捕虫数が多くなり（道防除所8／5付け注意報第2号）、被害が心配されたが、適期防除や迅速な追加防除などの対応により、斑点米被害は軽微であった。

イネドロオイムシ、ヒメトビウンカ、フタオビコヤガ等は平年並～少発生であった。

5. 次年度の栽培に向けて

春先の順調な滑り出しに始まり、初期生育の不良や夏場にかけての急激な寒暖差を経て、最後は収穫間際の暴風雨と不作は回避したものの、今年も気の休まらない一年となった。

一時の低米価は緩和されてきたが、相変わらず米の需要は低調で、また今後TPP交渉妥結の影響も懸念される中、よりいっそう需要に応じた産米出荷に向け、品質・収量の安定化やブランド米としての食味レベルの維持が必要と思われる。

好成绩を上げた事例では、移植後の不順天候にありながら、適期移植や細心な水管理等を駆使し、初期茎数をしっかり確保していたという。豊作年が続いたため、ともしれば基本技術を見失いがちではあるが、品質・食味・生産量に年次間の大きなフレがあっては、産地の信頼が損なわれてしまう。

気象変動が恒常化しつつある昨今、基本技術に沿った栽培管理は米づくりにとって品質・食味向上、安定確収に必要な不可欠であることを認識し、次年度の栽培に臨んでいただきたい。

（終）

稲 作

「北海道 稲作に挑戦する人々」

空知郡奈井江町 JA新すながわカエル倶楽部（代表 加藤勉 氏）

1. はじめに

平成27年12月に行われた「第1回ゆめぴりかコンテスト」では、「JA新すながわ」から出展された「ゆめぴりか」が最高金賞を受賞したが（写真1、2）、この受賞に大きく貢献しているのがカエル倶楽部である。カエル倶楽部は当協会主催の第52回（平成26年度）北海道優良米生産出荷共励会（生産グループ第1部）においても最優秀賞を受賞した特別栽培米の生産組織であり、その取り組みを紹介する。



写真1 最高金賞「ゆめぴりか」



写真2 収穫期の「ゆめぴりか」

2. JA新すながわカエル倶楽部

JA新すながわカエル倶楽部は、奈井江町で減農薬・減化学肥料栽培に取り組み、Yes! clean米を生産してきた先進的な8戸の生産者により平成18年4月に発足した。ブランドの確立や道外販路拡大のため、相互の情報交換や技術研鑽、環境保全への取り組みなどにより高度クリーン米や特別栽培米生産へのチャレンジを目的として組織化され、構成員10戸で現在に至っている。

3. 立地条件と稲作の経歴

奈井江町は、空知管内のほぼ中央に位置し、東部は歌志内市・上砂川町に隣接した丘陵地帯が続き、西部は石狩川を境に浦白町・新十津川町と接する。奈井江町の水田耕地面積は1,620haであり、転作強化の影響を受けつつも転作率は24%と低い。背景には、高級ブランド品種である「ゆめぴりか」の高品質米出荷割合が高いこともあり、その作付面積が順調に増加するなど、道内有数の良食味米産地として着実にレベルアップしていることが挙げられる。

4. 稲作技術の特徴

(1) ケイ酸資材の積極的な投入と透排水性改善

ケイ酸資材は、毎年、融雪と土壌改良を兼ねて100~150kg/10aを施用するとともに、ケイ酸散布機を用いて、幼穂形成期7日後に「ゆめシリカ」を20kg/10a散布している。

幼穂形成期前および開花直前には中干しを積極的に行うほか、毎年、全圃場において心土破碎と溝切りを併用し、暗渠についても事業の導入や自力で改修するなど、積極的に圃場の透排水性改善に努めている。

表1 圃場の透排水性改善

項目		年次	平成24年	平成25年	平成26年
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	%	60%	%
	当年産	搬出	15%	15%	%
		秋鋤込	85%	25%	100%
土壌改良材kg/10a	資材名		粒状ケイカル	粒状ケイカル	粒状ケイカル
	施用量		100kg	100kg	100kg
透排水性改善			心土破碎	心土破碎	心土破碎

また、稲ワラは秋に鋤込むことにより、食味改善と地力の維持・増進に役立てており、一部搬出も行っている(表1)。

(2) 施肥および作付品種

JAおよび普及センター指導の下で、毎年全筆で行っている土壌診断結果に基づき、肥料銘柄の選定、施肥量の調整を実施し、低コスト生産に結びつけている。また、全戸で高度クリーン栽培を行っており、有機質肥料が施用され、環境負荷の低減が図られている。

施肥量は地帯の施肥標準を遵守し、また、初期生育の確保と良食味米生産のために、いち早く成苗ポットや側条施肥を導入し、側条施肥割合の向上にも努めている(側条窒素割

合45~55%) (表2)。

作付品種は高度クリーン栽培の「ゆめぴりか」「きたくりん」および直播栽培の「大地の星」の面積が年々増加している(図1)。

5. 高度クリーン農業等の取り組み

高度クリーン米生産(農薬成分回数5以内)の実現のために、圃場に直接足を入れて



写真3 イネドロオウムシといもち病のチェック

表2 平成26年度の施肥量

施肥・栽培区分		N	P	K
全層	特裁・高度	3.6	3.6	2.3
	慣行	3.5	3.5	3.5
側条		4.9	4.9	4.9

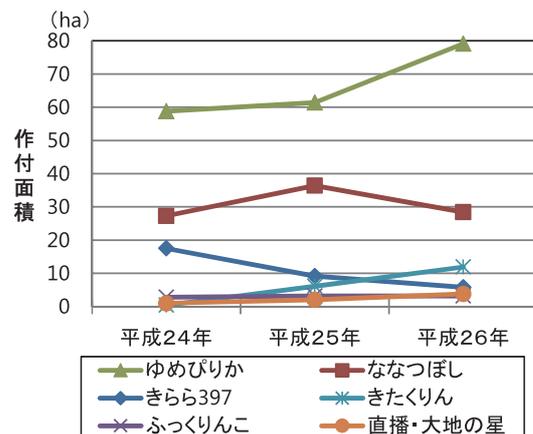


図1 品種別作付面積の推移

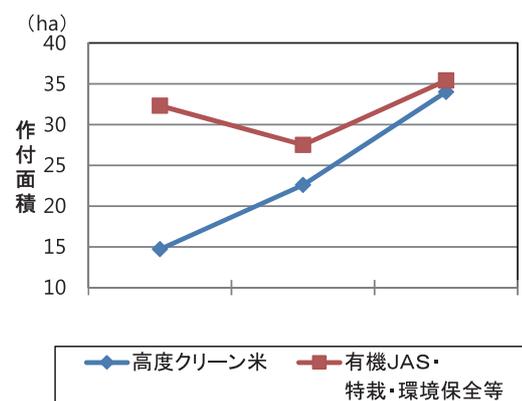


図2 高度クリーン米等の作付推移

自主的に行っているドロオイムシ・いもち病の予察活動（写真3）や、カメムシのフェロモントラップを活用した発生対応型防除や適期の畦草刈りにより被害粒軽減に努めている。その高い技術力と熱心な研究姿勢により、地域の減農薬米栽培の技術向上に貢献している（図2）。

6. 特徴的・先駆的な取り組みと産米出荷実績

(1) 育苗管理

育苗管理は成苗ポットの置床鎮圧および緩効性肥料の育苗箱追肥により健苗が育成されており、苗の活着も良好である（写真4）。

(2) 適期作業

奈井江町農業情報システム（NAIS）や普及センターからの営農技術情報を活用することにより、農薬や除草剤の適期散布や、幼穂形成期前の中干し、水位測定板を活用した前歴及び冷害危険期の適期深水管理や適期収穫など適期作業に努めることにより、高品質米

の安定生産が実現されている。

また、イネの葉齢や幼穂形成期の確認をJAおよび普及センターと連携して毎年行っており、圃場毎に生育期節を細かく把握し、適期作業に結びつけている（写真5、6）。

(3) その他

品質向上のため、出穂25日後（穂屈み期）まで走り水を継続することや、玄米判定による下見検査と適期収穫の徹底とともに、全量ライスターミナル出荷を基本として全て二段乾燥を行っている。

7. 今後の課題

カエル倶楽部では収量8.5俵、タンパク質含有率6.8%以下を生産物の基準としており（図3）、特に品質については罰則を設けて厳しい管理を行っているが、低タンパク米出荷率を安定的に維持することが年々難しくなっている。要因の特定は難しいものの、特別栽培米の作付割合増加により圃場の固定化が進み、有機質肥料の連年施用による土壌の



写真4 育苗調査とその後の青空教室



写真5 幼穂形成期の確認調査



写真6 圃場に入って茎数・草丈調査

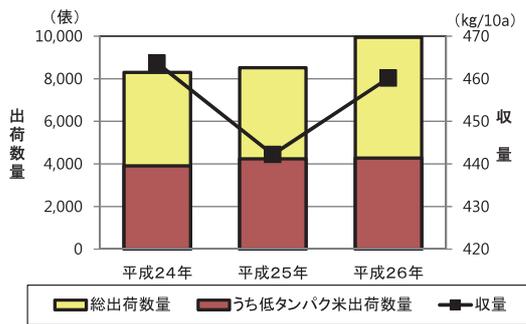


図3 収量および低タンパク米出荷量

富栄養化が認められる圃場があるのも事実である。

現在、栽培基準（JA新すながわ「ゆめぴりか」憲章）に基づき、土壌分析および施肥面談を行うとともに低タンパク米出荷に対する加算金制度を設置して対応しているが、今後は、土地条件や生産実績等に応じた作付制限を設けることも必要となろう。

また、主力メンバーが50歳代後半となっている現在、後継者の育成が喫緊の最重要課題であり、技術継承のための研修体制（ヨコの連携）等を充実することが特に重要と考えられる。

8. おわりに

当産地は平成6年のウルグアイ・ラウンド

合意以後、良食味米生産に向けて少肥密植栽培、水田の乾燥化、幹線用水の整備等のいち早い技術導入や環境整備への取り組みとともに、こだわりを持った実需との提携や新品種の導入を積極的に行ってきた。これまで地域をあげて品質向上、食味改善に取り組んできたが、近年は、夏期の異常高温による未熟粒（乳白・腹白・青死米等）の発生リスクの高まり等、気象等の環境要因の変動が著しいことも事実である。

今後の確固たるブランド形成に向けて、より一層の生産管理体制の強化が求められるため、技術連絡員（TIA：テクニカル・インフォメーション・アドバイザー）を設置して食味改善に役立てる等、カエル倶楽部の取り組みは、反省を踏まえながらも先を見据えてますます活性化している。カエル倶楽部発足当初から地域を牽引し、当JAゆめぴりか協議会の初代会長でもあった故山口光一氏も、今回の受賞を天国から祝福していることであろう。今後の更なる取り組みに期待したい。

（文責 一般社団法人 北海道米麦改良協会 技監 相川 宗厳）



写真7 カエル倶楽部のメンバー

麦 作

平成27年産 小麦の総括

北海道農政部生産振興局技術普及課 北見農業試験場駐在

上席普及指導員（農業革新支援専門員） 三宅俊秀

平成27年は、春の融雪が全般に早く、加えて4月以降、天候に恵まれ生育が良好であった。出穂期以降は、気温が低めに推移したことから、登熟期間が平年より長くなった。また、生育に応じた栽培管理に取り組まれたことから、10a当たり収量は過去最高となった。

北海道の平成27年産小麦の収量（農林水産省大臣官房統計部公表）は、秋まき小麦628kg/10a（平年対比144%）、春まき小麦327kg/10a（平年対比113%）となった（表1）。

「きたほなみ」の収量は、穂長は平年並で穂数は平年並からやや多くなったが、登熟期間が長く日照に恵まれたことから、千粒重も大きく製品歩留まりも高かった。

品質では、ホクレン扱い分による秋まき小麦の1等麦比率は97.3%、春まき小麦は91.7%となり、小麦全体では過去5年間で最も高かった（表2）。

表1 平成27年度産小麦の作付面積と収穫量（北海道）

区分	作付面積 (ha)	収量 (kg/10a)	平年収量 (kg/10a)	平年比 (%)	前年比 (%)
秋まき小麦	107,300	628	436	144	135
春まき小麦	15,300	327	290	113	99

注1) 農林水産省大臣官房統計部公表（平成27年11月17日）

注2) 平年収量は過去7年の豊凶年を除く5年平均

表2 麦類検査実績の推移

品種名	1等麦比率(%)				
	H23年産	H24年産	H25年産	H26年産	H27年産
きたほなみ	79.2	89.2	81.9	99.5	98.7
ゆめちから	—	72.8	68.1	80.0	88.2
キタノカオリ	81.3	73.2	96.6	97.0	99.8
きたもえ	9.7	61.9	84.4	79.4	31.2
ホクシン	69.8	77.3	—	—	—
ホロシリコムギ	78.5	86.9	—	—	—
タクネコムギ	79.0	86.8	—	—	—
秋まき小麦計	78.7	88.7	81.4	98.0	97.3
春よ恋	76.1	83.5	93.7	51.8	90.4
はるきらり	85.4	88.8	91.1	89.4	99.3
ハルユタカ	79.8	72.1	91.4	89.3	94.8
春まき小麦計	77.4	83.7	93.1	59.0	91.7
普通小麦計	78.8	88.4	82.3	94.1	97.3

注) ホクレン扱い分

表3 「きたほなみ」の品質（平成22～27年産）

分析項目	H23年産	H24年産	H25年産	H26年産	H27年産	基準値	許容値
容積重(g/l)	851	858	856	863	866	840以上	-
F. N. (sec)	409	398	376	425	418	300以上	200以上
タンパク(%)	10.7	10.8	11.1	12.0	11.1	9.7～11.3	8.0～13.0
灰分(%)	1.49	1.41	1.39	1.41	1.31	1.60以下	1.65以下

注1) ホクレン扱い分

注2) 項目別加重平均値

また、品質ランク区分では、一部の地域でタンパク含有率が高かったことから基準値を超えたが、ほとんどが基準値内であった（表3）。

以下、生育経過を振り返りながら今後の栽培を考えていきたい。

1 小麦の生育経過

(1) 秋まき小麦

は種期は、9月20日で平年より3日早かった。その後、気温はやや低温で推移し、10月15日の生育は空知、石狩で平年を上回ったものの概ね1～2日遅れとなった。

融雪が早かったことから、起生期は4月6日（早4日）となり、特に道央では7～10日早まった。雪腐病の発生は全道的に少なく被害面積率は1.9%であった（北海道病害虫防除所調べ）。また、一昨年十勝地域で問題となった凍上による根浮きの被害も軽微であっ

表4 平成27年産 秋まき小麦の生育状況

振興局	は種期 (月日)	起生期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)
空知	9.16(早5)	4.01(早11)	4.30(早7)	5.24(早7)	6.01(早7)	7.18(早2)
石狩	9.20(早1)	4.10(早9)	5.03(早9)	5.24(早9)	6.04(早7)	7.19(早3)
上川	9.14(早4)	4.10(早7)	5.03(早7)	5.25(早7)	6.03(早6)	7.19(早1)
オホーツク	9.23(早2)	4.11(±0)	5.03(早5)	5.27(早7)	6.05(早5)	7.26(早2)
十勝	9.23(早2)	4.04(早3)	5.01(早3)	5.25(早7)	6.02(早8)	7.20(早3)
全道	9.20(早3)	4.06(早4)	5.01(早6)	5.25(早7)	6.03(早3)	7.21(早3)

振興局	茎数の推移(本/m ²)			7月15日の生育状況			※千粒重(g)
	10.15	5.15	6.15	稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/m ²)	
空知	485(156)	1,344(98)	814(106)	84(107)	9.4(102)	787(115)	40.5(38.8)
石狩	353(148)	1,409(107)	800(115)	76(96)	8.9(99)	706(114)	40.5(38.8)
上川	395(90)	1,300(119)	849(127)	80(106)	9.1(105)	781(133)	42.4(39.8)
オホーツク	198(90)	1,427(90)	829(98)	78(97)	9.1(100)	718(97)	43.8(37.8)
十勝	190(90)	1,500(91)	762(95)	79(96)	9.1(99)	681(98)	40.8(39.0)
全道	248(104)	1,428(95)	796(101)	79(99)	9.2(101)	716(104)	-

注1) 各農業改良普及センター調べ

注2) 各生育期節の()内は平年対比の日数

注3) 茎数・穂数の()内は平年対比の百分率(%)

注4) 千粒重は各農試(中央、上川、北見、十勝)の奨決基本調査及び現地調査から(平年は過去10年間の基本調査の「きたほなみ」単純平均)

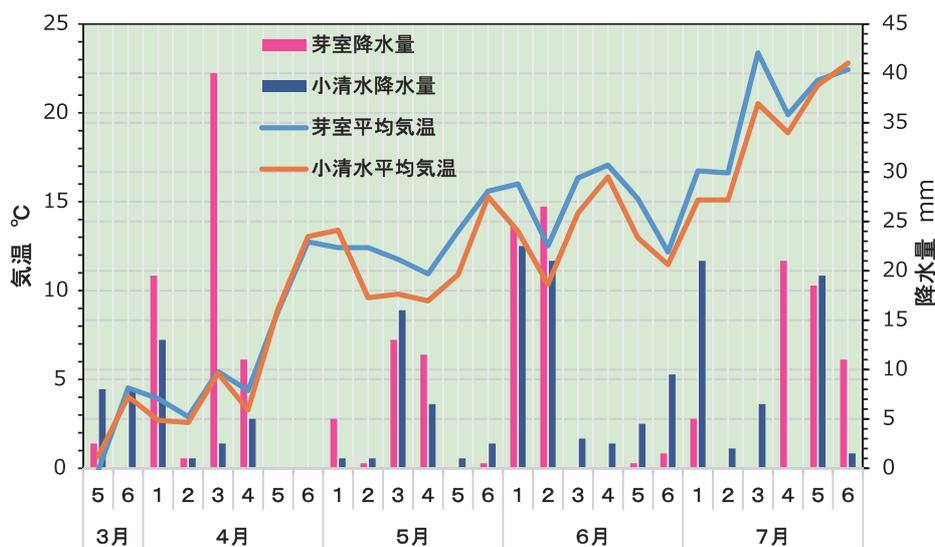


図2 平成27年3～7月の芽室町と小清水町の平均気温と降水量

(アメダスデータ)

た。

気温は、4月中旬までは平年並で、以降6月中旬まで高温で経過した。降水量は、道東では少雨傾向、道央道北では多雨傾向で推移し、特に十勝では、4月下旬から7月中旬まで著しい少雨となった。

幼穂形成期は、平年より6日、止葉期、出穂期は平年より7日早まった。

成熟期は、6月下旬～7月中旬の低温傾向により、平年より3日早い7月21日となり、登熟期間は平年より4日長い48日間となった。

成熟期の稈長は平年並で、穂数は平年よりやや多くなった。地域別では道央道北で稈長が長く、穂数は平年を上回っていた。また、十勝・オホーツクでは稈長は短く穂数はやや少なかった。

収量は、登熟期間が長く日照に恵まれたことから全道的に多収となった。品質では、一部タンパク含有率が高い地域もあったが、FN（フォーリングナンバー）、容積重、灰分とも良好であった。

越冬後の病害虫の発生状況は、アブラムシ類、赤さび病、赤かび病等の発生は全般に少なかった（北海道病害虫防除所調べ）。春先の茎葉黄化症状は、平年より多く散見されたものの、春期の生育が進んだことから症状の

消失も早く、影響は限定的であった。

(2) 春まき小麦

平成27年のは種は、は種始4月16日（±0日）、は種終わり4月27日（遅1日）となった。道央では、融雪が早かったことから、作業は順調に進んだが、オホーツクでは、ほ場の乾燥が進まず、は種期が平年と比較して遅くなった。

気温は、4月中旬以降～6月中旬までは概ね高温で推移したことから、出芽期は5月2日（早2日）と早まった。出芽の状況は、平年並みからやや良であった。また、降水量は、道東では少雨傾向、道央・道北では多雨傾向で推移し、特に十勝では4月20日以降から7月中旬まで著しい少雨であった。

止葉期は6月11日（早4日）、出穂期は、6月20日（早3日）となった。

6月下旬～7月上旬は低温傾向で推移したため、成熟期は8月6日（早2日）となった。

登熟期間は、平年より1日長い45日間であった。成熟期における稈長、穂長は、平年と比較して長かった。穂数も平年を上回った（平年比114）。一部過繁茂などとなったほ場では、倒伏が見られた。

収穫作業は、平年並～やや早まったが、降雨の影響もあり2～3日遅れで終わった。

表 5 平成27年 春まき小麦の生育状況

栽培様式	振興局	は種期 (月日)	出芽期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	成熟期の		
								稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/㎡)
春まき	上川	4.14(早8)	4.28(早7)		6.09(早4)	6.18(早4)	8.05(遅2)	93(100)	9.9(116)	610(112)
	留萌	4.19(早6)	5.05(早6)	5.30(早3)	6.13(早3)	6.23(早2)	8.09(遅4)	94(105)	9.0(106)	653(109)
	オホーツク	4.24(早5)	5.02(早2)	5.29(早3)	6.12(早3)	6.23(早3)	8.07(遅3)	83(98)	8.3(100)	671(113)
	平均	4.22(早2)	5.02(早2)	5.29(早3)	6.11(早3)	6.22(早3)	8.06(早2)	86(98)	8.6(103)	660(112)
初冬まき	空知	11.09(早2)	-	5.07(早7)	5.25(早6)	6.04(早6)	7.26(早1)			
	石狩		-	5.02(早14)	5.27(早8)	6.11(早5)	7.27(早1)			
	平均	11.09(早2)	-	5.06(早8)	5.25(早7)	6.04(早6)	7.26(早1)			

注1) 各農業改良普及センター調べ

2) 各生育期節の()内数値は平年対比の日数

3) 稈長、穂長、茎数・穂数の()内は平年対比百分率(%)

収量は登熟期間が長く、日照時間も長かったことから、多くの地域で平年を上回った。品質は一部子実蛋白含有率が高かった地域もあるが、FN(フォーリングナンバー)、容積重、灰分とも良好である。

病害虫の発生状況は、アブラムシ類、赤さび病、赤かび病等の発生は全般に少なかった(北海道病害虫防除所調べ)。

3 次年度に向けて

「きたほなみ」は、総粒数が一定以上多くなると、登熟条件が不良となった場合に製品歩留まりが低下する。倒伏を回避し、安定した麦づくりに向けて、あらためて、品種特性に応じたは種期・は種量・は種法及び生育に応じた施肥法について確認いただきたい。また、道東地区では2年連続で春～夏期間に少雨の影響を受けた。ほ場の保水性の向上と根張りの確保に向け、有機物施用等による地力の向上と土壌pH等の適正化に努める。

また、病害虫については、ほ場観察に努め適期防除の励行と適正な輪作体系を図ることが重要である。

麦 作

平成27年度 北海道産小麦流通実態調査報告

小麦の生産および流通に携わる関係者が、北海道産小麦のさらなる品質向上とその安定生産・供給に活かすことを目的に、平成2年より流通実態調査を実施しています。

本年度は、11月25日から27日の3日間で実施し、全道各地の農業試験場や普及センターをはじめ関係機関・団体などから18名の参加がありました。

調査先は、兵庫県（神戸市）および香川県（坂出市・高松市）内の製粉会社や製麺会社などの4ヶ所でした。それぞれの訪問先で、工場見学をはじめ試食会など担当者から詳細な説明を受けました。その後の意見交換では、お互いに北海道産小麦に対する熱い思いや、期待および要望を聞くことができ、たいへん有意義な調査となりました。

調査先のうち、「ブーランジェリー ビアンヴニユ」をホクレン農総研の太田職員に、「石丸製麺株式会社」は十勝農業改良普及センターの平松専門普及指導員に報告書を作成していただきましたので、ここにその内容を掲載いたします。

平成27年11月26日 ブーランジェリー ビアンヴニユ

ホクレン農業総合研究所 畑作物開発課 太田 宇香

ベーカリー激战区神戸市御影に店舗を構える“ブーランジェリー ビアンヴニユ”を視察した。日清製粉株式会社大阪営業部からもご同席いただき、意見交換を行った。

1. ベーカリーの概要

オーナーシェフ大下尚志氏は、“ピゴの店”、“イングレックプリュス”、株式会社モンシユシュを経て、2012年に「毎日食べるパンだからこそ『安全でおいしいものを』」をコンセプトに“ブーランジェリー ビアンヴニユ”をオープンされた。商品ラインナップは、バゲットをはじめとするハード系フランスパンや、クロワッサン、デニッシュペストリー、食パン、クリームパンなどの菓子パンから惣菜パンまで多彩だった。

2. 道産小麦の取り扱い

小麦粉は、それぞれのアイテムに合ったものを使用されているとのことだった。道産小麦は、「春よ恋」（日清製粉株式会社「春風」、

「春よ恋」100%）を使用されており、「春よ恋」を100%使用した食パン“みかげもちりん”を販売されていた。食パンのように副資材の少ないシンプルなパンほど、道産小麦の香りなどの良さを生かせるとのことだった。道産小麦は、以前に比べると扱いやすくなっている印象があるとのこと、特に香りの良さを評価されていた。現在のところ「ゆめちから」はまだ使用していないが、使用をご検討中とのことだった。多数の品種銘柄の小麦粉があることで選択肢が増え、小麦粉に合ったアイテムを作っていけるとのことだった。

3. 道産小麦100%の食パン

「春よ恋」100%使用の“みかげもちりん”は、湯種製法で作られた胚芽入りのプルマン型食パンだった。試食したのは焼成の翌日だったが、1日経っているにもかかわらず、しっとり感やふんわり感が維持されておりソフトな触感だった。食感にはもちり感があるものの、引きはそれほど強くはなくふんわり



大下オーナーシェフ



ビアンヴェニュー店の様子

りとしていた。食味は、比較的甘みのある配合に感じられたが、小麦の風味も強く、混ぜ込まれた胚芽の食感と香ばしい風味が良いアクセントになっていた。何もつけずにそのまま、あるいは軽くトーストするなど、シンプルにいただくのがおいしい食パンと感じた。

4. おわりに

普段あまり意見をお聞きすることのない、リーテルベーカリーのお話を聞くことができ、大変参考になった。営業時間中のお忙しい中ご対応いただいた大下シェフをはじめスタッフの皆様と、研修を主催していただいた北海道米麦改良協会に御礼申し上げます。

平成27年11月27日 石丸製麺株式会社

十勝農業改良普及センター十勝東北部支所 専門普及指導員 平松 真由美

香川県高松市香南町（高松空港から車で5分）にある石丸製麺株式会社において、代表取締役社長 石丸氏と企画開発室 津村氏に会社の概要と工場見学の説明をいただき、参加者で意見交換を行った。

また、「きたほなみ」を使用した商品の試食をさせていただいた。

1 会社概要

明治37年創業以来、乾麺の製造販売を行っている老舗である。

商品はうどん、素麺、冷麦、そば、きしめん、及び手打ち式乾麺、半生麺で1日に20万食生産しており、全国のスーパーや小売業、香川県内のお土産店、また海外向けにも販売されている。

「香川の誇りである讃岐うどん 伝統の味

を皆様に」を会社理念に、従来の讃岐うどんの製造に加え、新たなうどんの可能性を開拓するため、斬新な商品開発にも力を入れている。

また、平成27年4月に広くうどんについて知ってもらうため、讃岐うどん製造工場の見



写真1 石丸製麺株式会社全景

学が出来る見学ギャラリーを完成させ、地元の小学生や生産者、ユーザー、国内外の観光客が多く訪れている。

2 商品へのこだわり

(1) 商品開発へのこだわり

商品は自社製品や各会社PB商品の讃岐うどんや素麺が主であるが、近年は、香川の銘茶 高瀬茶を使用した『讃岐 茶うどん』(2014かがわ県産品コンクール 知事賞 最優秀賞受賞) (写真2 左) や青森県産のごぼうを練り込んだ『牛蒡うどん』 (写真2 右) 等、小麦以外の農産物とコラボレーションした特色のあるうどんの開発にも力を入れてお



写真2 素材の風味を活かした『茶うどん』と『牛蒡うどん』



写真3 石丸製麺の人気商品の一部

り、うどんの新たな可能性を模索し販売拡大に努めている。

(2) 製法のこだわり

製法のこだわりとしては、手打式製法を取り入れ、包丁切りの製法にこだわっている。

これは、石丸製麺独自の製法で、包丁切りカッターロボットで麺を切断する方法である。

従来のロール切刃製法と比べると大量生産はできないが、1本1本の角が立ち、もっちりとした弾力のある麺となる。

(3) 国産原料のこだわり

大多数がオーストラリア産小麦を使用しているが、香川県産小麦「さぬきの夢2000」が登場してから、国産小麦は味が良く安心ということから消費者の国産志向が高まってきており、国産小麦の取り扱いが多くなってきている。

主な銘柄は、香川県産「さぬきの夢」、北海道産「きたほなみ」、愛知県産「きぬあかり」である。

国産小麦100%使用した商品には、「さぬきの夢」『さぬきの夢 讃岐うどん』と、「さぬきの夢」と北海道産「きたほなみ」を50%ずつブレンドして作られた『日本小麦倶楽部 讃岐うどん』 (写真3 左から2番目と中央手前) があり、人気商品となっている。

「さぬきの夢」は香りが、「きたほなみ」はもっちりとした食感が良く両者の長所を活かすためにブレンドしている。



写真4 石丸社長より工場内の説明を受けている様子



写真5 つるつるもっちり美味しい「きたほなみ」使用『日本小麦倶楽部讃岐うどん』の試食

今後の戦略としては、TPP対策からも原料を香川県産「さぬきの夢」に限定せず、日本全国各産地の小麦の特徴をバランス良く活かし、国産小麦のブランドを維持していくことを目指している。

3 北海道産小麦について

良い商品を作るためには、良い原料が必要である。いくら製麺技術があっても良い原料がないと良い麺は作れない。その点、北海道産小麦は品質・量ともに国産のものの中では安定しており、さらに「きたほなみ」は白さともちもち感に優れている。

北海道産小麦の取り扱い量は現在約1割であるが、今後さらに増える見込みである。

北海道産小麦100%を使用したPB商品や十勝産小麦100%使った商品（写真3 左から1番目）の製造もしており、人気である。

4 おわりに

今回の小麦流通実態調査において、実需者の国産小麦に対する期待は大きく、また高まってきていることがわかった。中でも北海道産小麦は、品質・量ともに安定していると

石丸社長直伝

乾麺を美味しくゆでるポイント！

1. 差し水は絶対にしない！

お湯の温度が下がると麺が固くなってしまうため、火加減で調節する。

2. 水洗いをしっかりする！

かけうどんやざるうどんにする場合は、うどん表面のぬめりを取るためにしっかりと流水で洗う。



石丸製麺(株)にて

いうことで評価されている。

しかしながら、さらなる品質の安定化（産地間差、年次によるタンパク値の変動をなくすこと）が求められていることから、天候に左右されない栽培技術の向上が重要であることを再認識し、それに向け生産者、関係機関と共に連携を強め進んでいかなければならないと痛感した。

最後に、今回の小麦流通実態調査を主催していただいた北海道米麦改良協会と研修を引き受けて下さった石丸製麺株式会社の皆様に心より感謝申し上げます。

麦 作

第36回（平成27年度）北海道麦作共励会審査結果

平成27年11月11日(水)に審査委員会（委員長：国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター 入来寒地作物研究領域長）を開催し、下記のとおり部門ごとの各賞を決定いたしました。

なお、有限会社新和農場（小清水町）とオホーツク網走第21営農集団利用組合（網走市）は、平成27年度の全国麦作共励会に推薦（北海道ブロック）させていただきました。

第36回（平成27年度）北海道麦作共励会表彰者

※敬称略

【第1部 畑地における秋播小麦 個人】

最優秀賞 有限会社 新和農場（小清水町）

優秀賞 新井清隆（帯広市）

【第1部 畑地における秋播小麦 集団】

最優秀賞 オホーツク網走第21営農集団利用組合（網走市）

優秀賞 中鹿追コンバイン利用組合（鹿追町）

【第2部 水田転換畑における秋播小麦 個人】

最優秀賞 株式会社 滝谷農場（岩見沢市）

優秀賞 若松達矢（新篠津村）

優秀賞 有限会社 田島土地開発（美唄市）

【第2部 水田転換畑における秋播小麦 集団】

優秀賞 美唄麦作営農組合（美唄市）

麦 作

平成27年度 全国麦作共励会審査結果

平成27年度全国麦作共励会中央審査委員会が12月25日(金)に開催され、北海道ブロックから推薦した農家の部の有限会社 新和農場(小清水町)が「農林水産大臣賞」を、また、集団の部のオホーツク網走第21営農集団利用組合(網走市)が「全国農業協同組合連合会会長」を受賞されました。

中央表彰式は、平成28年2月25日(木)(東京都千代田区ホテルルポール麹町)で開催されることになっております。

平成27年度 全国麦作共励会受賞者

(敬称略)

I. 農家の部

賞 名	氏 名	住 所
農 林 水 産 大 臣 賞	有限会社 新和農場 新村 正敏	北海道斜里郡小清水町字北斗
全国米麦改良協会会長賞	福澤農園 株式会社 古賀 恵美子	福岡県嘉麻市牛隈
全国農業協同組合 中央会会長賞	常澤 毅	福井県坂井市三国町石丸
全国農業協同組合 連合会会長賞	加藤 剛	三重県四日市市上海老町
日本農業新聞会長賞	井上 雅貴	愛媛県西条市禎瑞

II. 集団の部

賞 名	集 団 名	所 在 地
農 林 水 産 大 臣 賞	平沢北生産組合	岩手県紫波郡紫波町平沢字松
全国米麦改良協会会長賞	重ノ木営農組合	佐賀県鹿島市大字重ノ木
全国農業協同組合 中央会会長賞	農事組合法人 ウエスト・いかり	山口県柳井市伊陸
全国農業協同組合 連合会会長賞	オホーツク網走 第21営農集団利用組合	北海道網走市音根内
日本農業新聞会長賞	農事組合法人 よさみ	愛知県刈谷市高須町

稲作・麦作

平成27年度 稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ

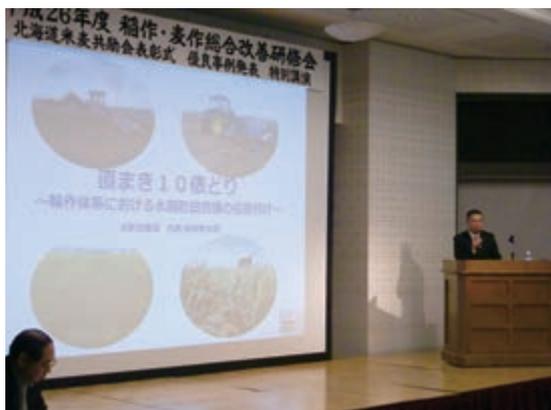
本年も、優良事例の発表や特別講演など、実需者のニーズに応えた良質な米麦の安定生産および供給に向けて、生産者・関係機関等を対象とした研修会を、札幌で開催いたします。

この研修会は、生産者をはじめ農協職員、市町村、関係機関・団体の担当者の皆様も参加をいただけますので、多数のご参加をお待ちしております。

詳細については、別途、ホームページや農業新聞による告知、ならびに各地区協会からの文書などでご連絡いたします。

受講料は無料ですが、参加の申し込みにつきましては、事前に各地区の米麦改良協会等へご連絡願います。

1. 日時 平成28年 3月11日（金） 13時より（12時30分受付開始）
2. 場所 ホテルモントレーエーデルホフ札幌
（札幌市中央区北2条西1丁目 TEL：011-242-7111）



◎良質米麦の出荷目標



- 一等米 100%
- 整粒歩合80%以上確保
- 精米蛋白質含有率6.8%以下
- 仕上がり水分14.5～15.0%
- 入れ目1%以上確保
- 全量種子更新



- 一等麦 100%
- 低アミロ麦皆無
- DON暫定基準値1.1ppm
以下でできるだけ低いこと
- 赤かび粒混入限度 0.0%
- 異臭麦皆無
- 十分な入れ目の確保
- 全量種子更新

◎農産物検査事業の方針

- ◆公平、公正、迅速に行う。
- ◆必要な技術的能力の維持・向上に努める。
- ◆客観性・公平性から他部門からの影響排除。
- ◆制度の適正な運営に寄与する。



発行所

一般社団法人 北海道米麦改良協会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目 共済ビル5階 TEL 011-232-6495 FAX 011-232-3673

【業務部】E-mail beibaku@basil.ocn.ne.jp

【検査部】E-mail beibaku-kensa@carrot.ocn.ne.jp

北海道米分析センター

〒069-0365 岩見沢市上幌向町216の2 TEL 0126-26-1264 FAX 0126-26-5872

E-mail bun1@plum.ocn.ne.jp

<http://www.beibaku.net/>